

コラム

もりかも

ある職員から「もりかも」という言葉を聞いた時は、何のことか分からなかった。説明を聞いて、これが「森を醸す」、つまり、私の総長就任以来のキャッチフレーズである「森を動かす」の応援コピーであることを知った。可愛いカモのマスケット・キャラクターまである。その姿を、原作者の遠藤暢雄さんにもう一度、このコラムのためにスケッチしてもらった。

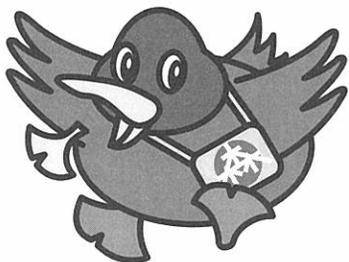
職員たちが、東京大学の次の時代の基盤を固めようという私の考え方に共感をもって動いてくれるのは、実に心強い。「森を動かす」ための柱の一つは、「強い個人」である。学生、教員とともに、職員も強くなければ、知の森の生態系はサステイナブルではない。「行動シナリオ」の中でも、「プロフェッショナル」としての職員」という目標を掲げている。

先日、「行動シナリオ」と大学予算削減問題についての全学説明会を安田講堂で開いたときに、この目標の意味について、一人の若手職員が立ち上がって私に質問をした。その時は、「他の人と連携しながら自分の専門領域を深めること、同時にウイングを広げて、その専門を他の人と一緒に活用していけること」といった趣旨の、「コミュニケーション」にポイントを置いた答えをしたが、ストンと理解できる説明では多分なかったと反省している。その職員は、敬老精神に富んでいて、一応納得したような顔をして座ってくれたが。

後でもう一度、この質問を反芻しているときに、ふと、「気働き」という言葉が浮かんできた。若い人にはあまり耳慣れない言葉かもしれない。広辞苑を引いてみると、「事の成り行きに応じて即座に心のはたらくこと」とある。「気の利くこと。気転」ともあるが、言うまでもなく、他人との関係において意味をなす言葉であろう。「気働き」のポイントは、周囲の人や仕事の動きを敏感に察知しながら自分の仕事をすすめていく、というところにあると思う。

これは何も仕事に限ったことではない。いまの世の中、周りの動きに因應することを、妙に恥ずかしがる風がある。気がつかないわけではない。決して冷たいわけではないのだけれども、何か声がすつと出ない、身体がさつと動かない、というところがあるようだ。この「気働き」が身につけているかいないかで、その人を取り巻く場やコミュニティの雰囲気は大きく変わることだろう。

「プロフェッショナル」というと、つい、孤高の存在をイメージしやすいが、連携した仕事求められる職場ではそんなことはありえない。何より、「気働き」は、他人を助けるだけでなく、自分の力の幅をつけ、鍛えていくことにつながる。「情けは人のためならず」である。「もりかも」のキャラクターの目も、いかにも「気働き」の精神に溢れているように、頼もしい。



もりかも